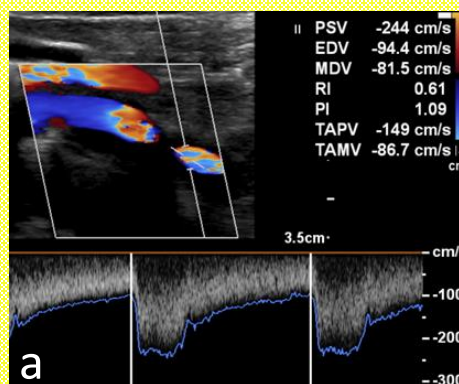


# 非侵襲的な脳梗塞原因検索

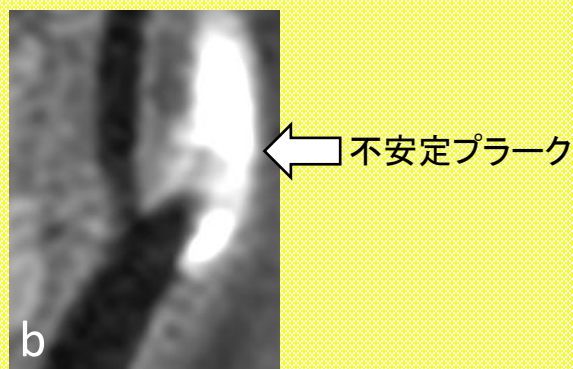
かつて脳梗塞の原因検索には脳血管撮影が重要な役割を果たしていました。しかし、この検査は造影剤の使用を伴ううえ、塞栓性の合併症を引き起こす可能性があるため、侵襲的な検査とされています。そのため、近年ではMRIや超音波検査などの非侵襲的な検査を中心に実施しています。

## 内頸動脈狭窄

図 a に示すように、頸部血管エコー検査において内頸動脈の高度な血流上昇が認められることから、内頸動脈に高度の狭窄があることが分かります。さらに、同部位のプラークはMRIで高信号を示しており、不安定な状態であることが示唆されます。そのため、外科的処置の適応を検討すべきと考えられます(図 b)。



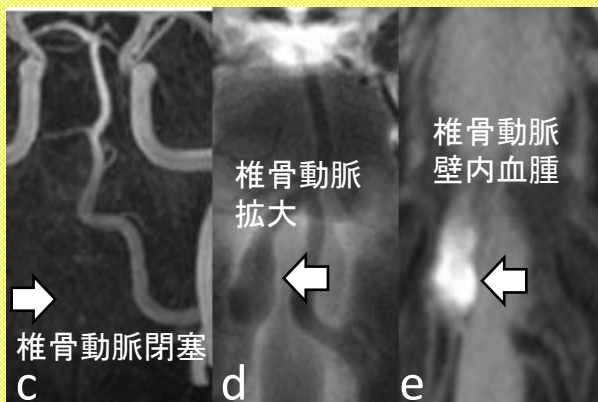
頸部血管エコー検査



Black-Blood 法頸部MRI 前額断拡大

## 椎骨動脈解離

図 c に示すように、MRAにより椎骨動脈の閉塞を同定できます。さらに、BPAS (Blood Flow-sensitive Anatomical Scan) という撮影法を用いることで、血管の外径が拡大していることが確認できます。また、Black Blood法による血管壁観察では、血管内に血腫が存在することが確認され、椎骨動脈解離の診断に役立ちます。これらの3つの画像診断は造影剤を使用せずに実施可能であり、脳血管撮影を行わずとも椎骨動脈解離を診断することができます。



頭部MRA

BPAS

Black-Blood 法  
MRI 前額断拡大